

ヒロシマをつなぐ

原爆投下69年

(上)

「このシーンはずみ。広島女学院高校のは原爆が話題に出るこ
せない。多くの人に見生徒20人が2010年とはなかった。平和活
てもらわないと」。手度末から、首都大学東動に関心を持っていな
を震わせ涙ながらに被京(東京)に協力し、人間だった」と自ら
爆体験を語る高齢女性制作に携わっている。を省みる。
の動画が映ったパソコ 彼女らの顧問が松山 阪神大震災後、赴任
ン画面を、数人の女子 市出身の矢野一郎教諭 先で広島市役所を訪れ
高校生が食い入るよう (52)。「被爆者から直た。被災者と知った若
に見つめる。視線の先 接体験を聞けるのが一い職員の親身な対応に
の動画は、地図に浮か 番いいが、記憶が曖昧 感謝すると「原爆を知
ぶ顔写真を選択すると になり話す力が衰えて っていますから」。以

アーカイブ制作

核廃絶 身近に感じて

証言が映像や文章で表 核兵器廃絶 来、自分にも何かでき
れる「ヒロシマ・アー の主張の裏付けとし のではとくすぶって
カイブ」に収められる。 て、被爆者の話が原動 いた。
アーカイブは、原爆 力になる」と活動の意 転機は08年に生徒か
投下後の広島の写真や 義を語る。 ら持ちかけられた核兵
被爆者の証言が、イン 矢野教諭は、県内の 器廃絶の署名活動。「い
ターネットの立体地図 高校を卒業し京都の大 い意味で引きずり込ま
「グーグルアース」上 学へ進学、大阪で働い れました」と、平和活動
に重層表示される仕組 た。「愛媛にいたとき に取り組む自分の場所

ができたと感じている。 者の思いが伝わるよう しない。少しでも、
署名メンバーでもあ 言葉を継ぐのをためら 人ごとじゃないと身近
る生徒らはアーカイブ う表情やしぐさを残そ にとらえて行動しても
にも取り組み、ビデオ うと腐心している。 らえるきっかけになれ
証言収録のためカメラ 2年の石原香音さん ば」と思いを語る。
を手に被爆体験者に話 (17)は「核兵器や戦争 矢野教諭は、彼女ら
を聞く。インタビュ はだめってみんな言う と関わっていくうちに
は最長2時間。15〜30 けど、自分とは関係な 自身の心境が変化する
分に編集するが、被爆 ーと思ってしまうかも のを感じた。「この地

上の平和あってこそ のの心安だと、子ども たちに教えられた」
愛媛と海を隔てた先 に原爆で苦しんだ人が 大勢いる。「今の生活は 平和の上に成り立って いるんですよと、愛媛 の人たちにも伝えた い。広島に来て平和記 念資料館や平和記念公 園を歩いて、お好み焼き を食べながらでもいい。 何かを感じてほしい」
◆ ◆
79・44歳。201 3年度末時点での、被 爆者健康手帳保有者の 平均年齢だ。原爆投下 から69年を迎えた広 島。高齢化が進み、被 爆体験の伝承が課題と なっている。集团的自 衛権の行使容認が閣議 決定される中、原爆の 恐ろしさや平和の尊さ を次代へとつなぐため にどうすればいいの か。伝承へ一歩を踏み 出す人々の姿を追う。
(中田佐知子)



「広島市の人たちに触れることで自分自身が変化した」と語る 広島女学院高の矢野一郎教諭―8月1日午後、広島市